



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	書評 成田喜一郎著『実践と理論を架橋・往還する「珠玉」のコンテンツ/スキルへの誘い:子どもと教師の学びの拡張と深化をもたらす』( fulltext )
Author(s)	孫,美幸
Citation	ホリスティック教育/ケア研究(22): 110-112
Issue Date	2019-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/159194">http://hdl.handle.net/2309/159194</a>
Publisher	日本ホリスティック教育/ケア学会
Rights	

書評 成田喜一郎著

## 『実践と理論を架橋・往還する「珠玉」のコンテンツ/スキルへの誘い 子どもと教師の学びの拡張と深化をもたらす』

(全国学校図書館協議会〈電子ブック〉、2018年)

孫 美幸 大阪大学

SOHN Mihaeng

本書は、1978年4月から2007年3月までの29年間を東京学芸大学附属大泉中学校（うち1年間は附属世田谷中学校）で社会科教諭・副校長を、その後11年間を大学教員として勤められてきた成田喜一郎氏が実践と理論研究を往還する中で創成、蓄積してきた成果である。A4判1枚裏表で書かれた「A-YON通信」が本書のベースとなっており、じっくりと長い論文や分厚い報告書を読む時間のない学校現場の教員に向けて書かれたものである（72頁）。24回の連載内容を大別すると、「具体的な教育実践とその背景にある理論」「組織とカリキュラムのマネジメントから立ち上がる理論」「教育活動を支える哲学の可能性」という3つの領域で、8篇ずつで構成されている（73頁）。

### （1）教育実践の場に関わる全ての人々へ開かれた眼差し

本書の「はじめに」には、成田氏の教育実践と研究への強い意志が書かれており、それがこの一冊全てに貫かれている。「実践と理論を架橋・往還する」ことは、「学校現場と大学院、教育と研究、実践者と研究者、子どもたちと教師、学ぶことと教えること、情動と認知など、ふたつの中心点を有し、それらのつなが

り・つりあい、つつみこみつづける「楕円の思想・哲学」（内村鑑三や大平正芳等）に支えられてきた「概念」であるという。そして、「子どもの学びを拡張・深化をもたらすには、教師の学びの拡張と深化が不可欠であること」、「学習（修）者」と授業者との間には、単に学び／教えるという役割を超えた「相即不離」の関係性（華嚴思想）が不可欠であると述べる（2頁）。本書が多くの方が読めるように閲覧・ダウンロード可能な電子書籍（東京学芸大学附属図書館のリポジトリより可能（<http://ir.u-gakugei.ac.jp/handle/2309/149369>））であること（2頁）。「A-YON通信」が、時間のない教育現場の教員が「明日からでも簡単に実践に移せるコンテンツやスキル」を表に、「その実践に至る経緯や背景、その実践に架橋・往還する意味づけや裏づけ」が裏にされていること。「通信」には「精神的・文化的に「信頼を通わず」という学びの「意伝子」としての意味を込めたこと（6頁）。その全てが上記のような成田氏の考えとつながっていくものである。教育現場や研究の場で多くの教員との対話を通して紡いできた「珠玉」の言葉の数々を、読者のみなさんにはぜひ直接手に取って体感して頂きたいと思う。そして、見逃せないのは、子どもたちとの対話が、アートのように本書に織り込まれているこ

とである。「創作叙事詩」(7-9頁)、「はんせい歌／えいこん歌」(10-12頁)、「「問うことを問う」ということ(2)」(33-35頁)、「本質的な問い(essential questions)と出会う(3)」(64-66頁)など、成田氏と子どもたちの対話のアートを実感できる。サティッシュ・クマール(2017: 250-251)が「誰もがみんな“特別なアーティスト”」であり、「生きるアート」という考えを述べていたのを再認識できる場面である。子どもたちの生きた声と呼応していく数々の実践や言葉は、成田氏の生きてきたライフストーリーと重ねてみると、改めて教育というアートのあり方を読者に感じさせることになるだろう。

## (2) 教員の実践の振り返りと新たな実践/研究の創成へ——分節化された時間から永続する問いの時間を通して

評者は公立中学校で四年間教員として働いた経験がある。本書を読んでいると、いろんな場面で自分が教育現場で働いていた頃の実践を振り返り懐かしく思ったり、もっとこうすればよかったと反省したり、あの頃はそれでも必死だったよなとキャリアの浅かった自分を肯定してみたりと、自身が教育というフィールドに関わるようになった初期のころを思い出し、なかなかページが前に進まない。あの頃一番自分自身にとって辛かったのは、教育というアートを創成していく自分の中身が枯渇していくような経験をしたことだった。それは、新たなアートを創成していく上で必要な自身の学びの時間が不足していたことが大きな要因であったと思う。そして、それは現在教育現場で働いている多くの教員が変わらず実感していることではないだろうか。多忙化し、雑多な内容の仕事や情報に次々と対応しなければならない状況は、個人の人生の時間をどんどん分節化し、人間の精神性も解体していくことにつながるだろう。そのような状況は、現代のメディアやIT環境に

おける「精神的な危機」について述べた鷺田清一の言葉を想起させる。鷺田(2018)は、スイスの思想家マックス・ピカート(1971)を引用しながら、雑多な複数の情報を次々と受け入れるというのは、「人が内的な持続、内的な連関を手放すことにほかならない。つまり、人はここで自分自身を「解体」しようとしている、自分自身から「逃亡」しようとしているのだ」と述べる。それでは、「希望や悔恨、祈願や哀悼、憐憫や共感といった人間的な感情」を養えなくなってしまう。鷺田はそれを「内なる「世界への対抗重量」が消失しかけている」と述べる。本書には自分自身からの「逃亡」から、もう一度「内的な持続や連関」に引き戻す視点が描かれている。それが「本質的な問い(essential questions)」である。成田氏は、「本質的な問いは、バラバラな個別具体的な知識をつなぎ、本時や単元、さらには教科・専門性を超えてつなげてゆくことの可能性を持った問い」であること。そして、「学校現場に抽象の復権・抽象の意味・抽象の拡張・抽象の深化、深くて長く続く問い(知を愛し続けること)の意味を考えさせてゆく」と述べる(60頁)。その後の「ESD実践にとって不可欠な本質的な問い」(62-63頁)でも、「子どももおとなも共に抱き続けられる「問い」の発見とつながり」「実社会の中で《本質的で根源的な問い》を生き続けるということ」の大切さが描かれている。このような「問い」をもち、一緒に考え、生き続けること、それが生きる時間軸を永続的なものに転換させることにつながると評者は考える。A4一枚に込められた通信はその形式からも、「分節化された時間」を生きる教員たちに、学びの「永続した時間」へといざなうきっかけとなっただろう。そして、この通信が書籍化したことで、多くの人たちにその機会が訪れることを願う。驚いたことに、本書を読み終えた時、評者は成田氏のライフストーリーと共に、自分のライフストーリーと教育

の関わりを考える時間、「本質的な問い」を生きた対話の時間をもつことができた。みなさんもぜひ本書中の「ライフヒストリーデザイン曼荼羅」(49-51頁)にチャレンジすることをお勧めしたい。そこから、新たな教育というアートの創成への力につながることを確信するからである。

成田氏が最後にあげた本書の課題「新しい教育学の理論や哲学の文献を体系的に紹介できずに終わってしまった」ことについて、「A-YON通信」

の続編の機会を今後ぜひ創って頂きたいと願っているのは評者だけではないはずである。

**【参考文献・資料】**

ビノーバ・バーベ サティシュ・クマール著 辻信一・中久保慎一翻訳 辻信一・上野宗則編集 『怖れるなかれ 愛と共感の大地へ』SOKEIパブリッシング,2017年。

マックス・ピカート著 佐野利勝訳 『騒音とアトム化の世界』みすず書房,1971年。

鷲田清一「こころのアトム化」京都新聞朝刊「天眼」2018年4月29日付。